

共同研究プロジェクト紹介 方言の形成過程解明 のための全国方言調査 方言分布の変化をとらえる

著者	大西 拓一郎
雑誌名	国語研プロジェクトレビュー
巻	3
号	1
ページ	15-25
発行年	2012-07
URL	http://doi.org/10.15084/00000699

方言分布の変化をとらえる

Capturing the Changes of Dialectal Distributions

大西 拓一郎 (ONISHI Takuichiro)

1. 方言の分布は変わる？

同じ日本語なのに場所によりことばが違うことがある。「学校へ行かない」という簡単な文を例にとろう。関西の人は「学校へ行カヘン」と言うし、東北の人は「学校サ行ガネ」と言う。このような土地によることばの違いが方言だ。

「土地による」ということは、使われている土地の範囲があるはずだ。例に沿って言えば、「行カヘン」や「学校サ」が使われているのはどこからどこまでなのかということである。関西とか東北というだいたいのところは想像できるだろうが、正確にはどこからどこまでなのか問い質されても一般には答えられない。実はこれに対する回答は用意されている。図1を見れば動詞の否定形を作るときに「～ヘン」のような形をとるのはどこなのかがわかる。図2では、「学校へ」の「へ」のように動作の方向を表すのに「サ」が用いられるのはどこなのかが確認できる。

話は変わるが、ことばはいつまでも同じで変わらないものだろうか。100年前のご先祖様と100年後の子孫のことを考えてみよう。私たちと同じことばを話しているだろうか。100年前というと、19世紀の終わり頃か20世紀の始まり頃になる。その頃に書かれた本を図書館で探してみよう。すらすら読めるだろうか。

もし身近に言語学や国語学など言語の研究を学んだことがある人がいたら、ことばは変化するかどうか、ぜひ尋ねてみてほしい。少しでもその分野のことを学習した人であればすぐに答えてくれるはずだ。必ず変化する。変化しない言語はないと。ついでに簡単な例を挙げてくれるかもしれない。例えば、古典の教科書に必ず載っているような有名な一文を口にして、こんな風に今しゃべっているか？と。

ことばは変化する。方言だってことばだから、変化しないわけがない。そうすると、ことばが変化したなら、方言の分布はどうなるのだろうか。

これを考えるために、次のような方言分布を想定してみよう。シーソーという遊具がある。公園や校庭で遊んだ経験があるだろう。ある地域の分布を調べたら、図3の左側(a)のようだったとする。この地域には、ギッコンバットンとテッタートッターがあり、町を東西で二分している。あるとき、西側の地域の一部でギッコンバッタンの言い方をやめて、トットキーコーが使われるようになった。これがことばの変化である。この地域では、ギッコンバットンがトットキーコーに変わったと実感されるはずだ。このようなことばの変化が起こると

分布はどうかというと、ギッコンバッタンの分布域の中にトットキーコーの分布領域が新しく発生することになる。その様子を示しているのが、図3の右側 (b) である。図3の左 (a) と右 (b) を比べればわかるように、ことばの変化が発生すると、分布も必然的に変化する。方言分布の変化は言語変化を前提とし、言語変化は分布変化を必ず生み出す。

動詞の否定形（書か）ない 『方言文法全国地図』第2集80図より

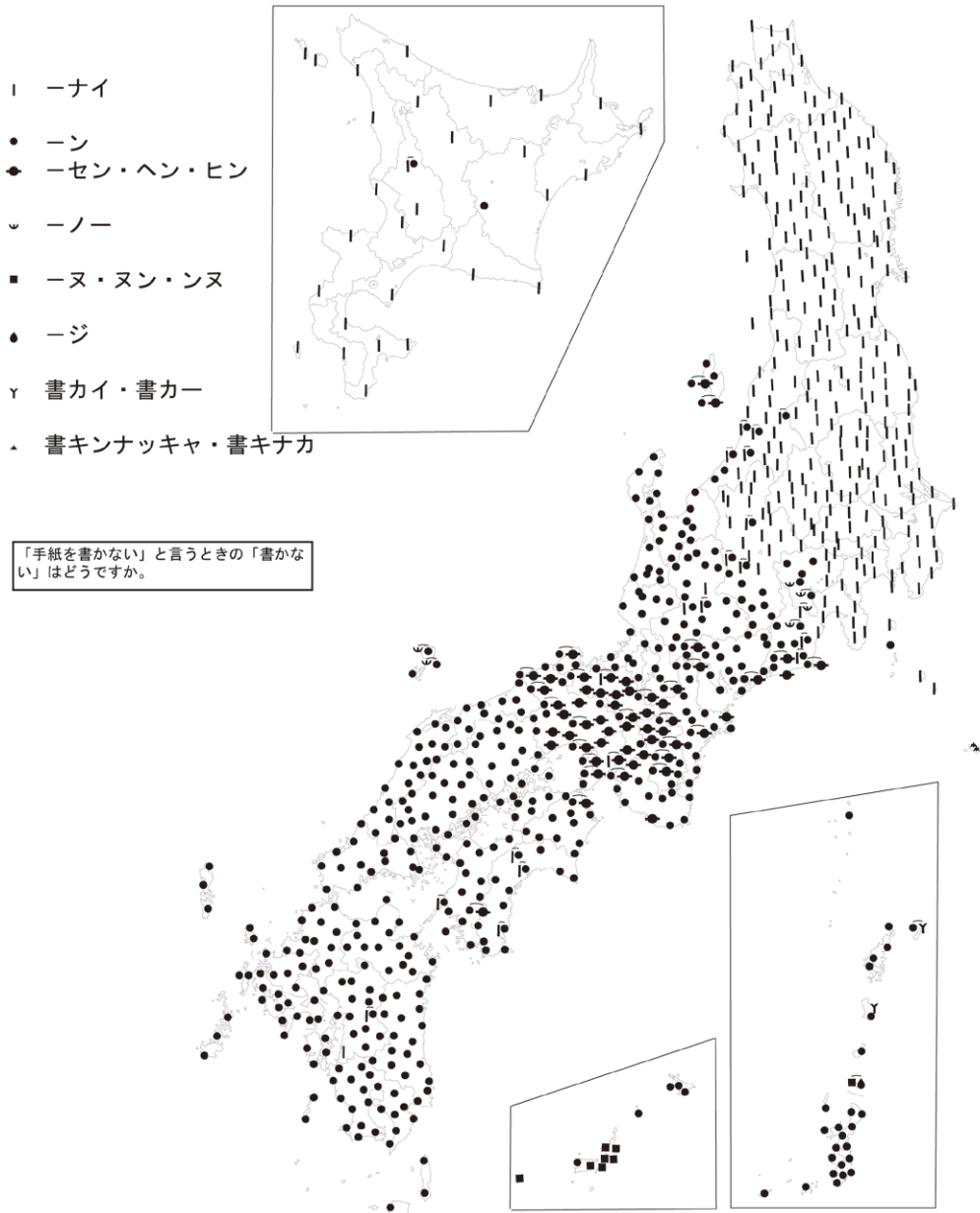


図1 動詞否定辞の全国分布

そう考えると 1980 年頃の実態に基づいて描かれた図 1 と図 2 は、今も同じ状態にあるとは約束されていないことになる。

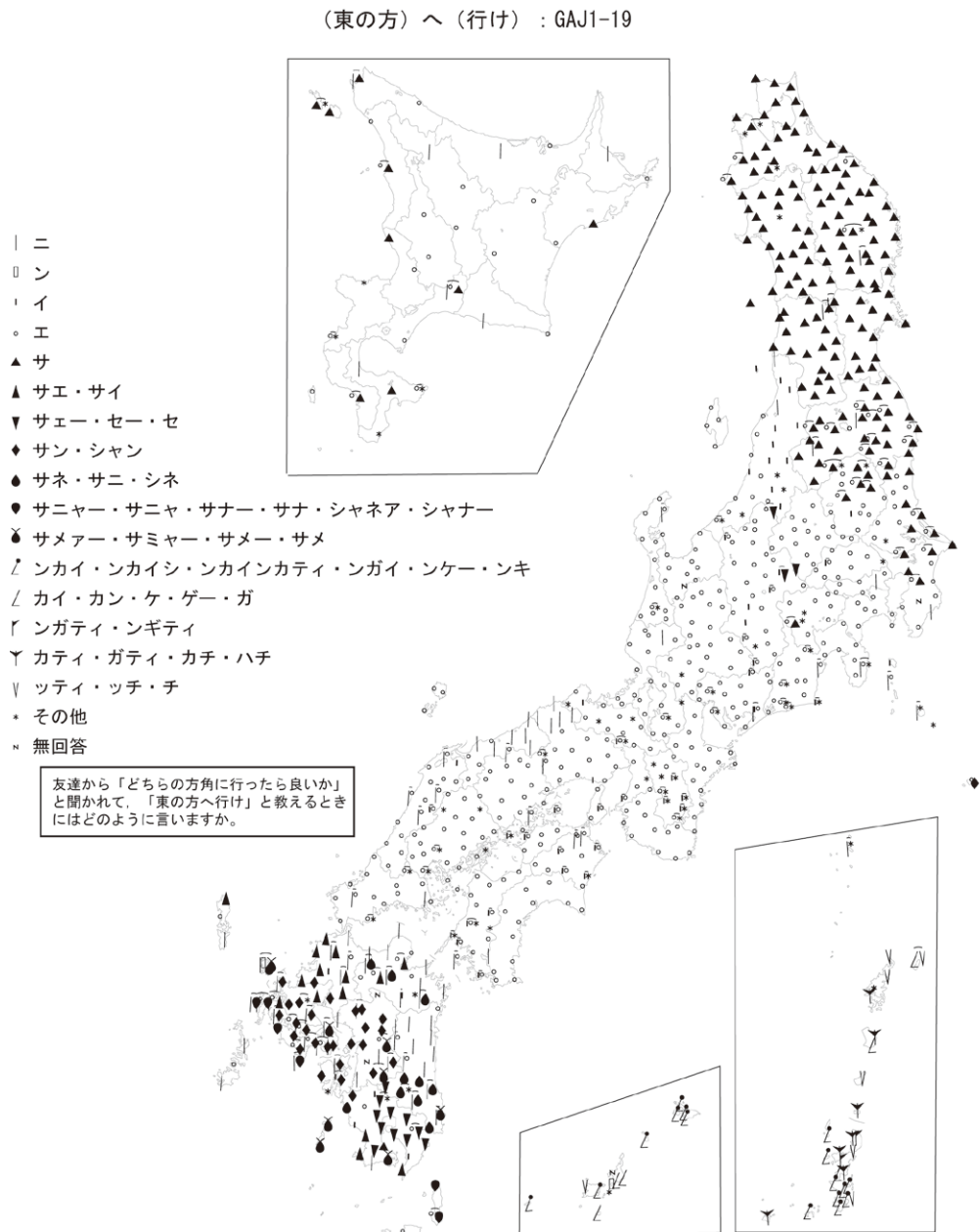
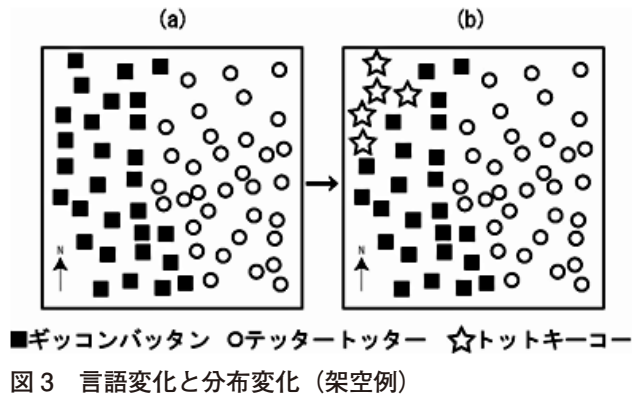


図 2 動作方向を表す格助詞の全国分布



2. 想定される変化

図3に挙げたのは架空の例だった。実際にはどのように分布は変化すると考えられるだろうか。これに対して、従来から方言学では「方言圏論」という考え方を用意していた(柳田 1930)。これは簡単に言ってしまうと、次のような考え方である。ことばの変化は特に文化の中心地で発生しやすい。その中心地で発生したことばの変化は、地を這うように外側に向かって拡散していく。中心地で発生することばの変化は1回にとどまらず、何度も起こる。起こるたびに新しいことばは外に向かって広がる。これらの跡を地図上に表すなら、文化の中心地を中心とした波紋のような同心円状の分布となって現れる。ただし、日本列島のような細長い形の土地の上では、途切れ途切れの同心円状分布が現れる。

このような中心地からの連続的拡散は、何も日本全体の歴史的な中心地である京都に限らず、小地域内においてもその中心地からの拡散が起こり、さらに同心円状分布は、言語変化の順序に従うはずだから、これを活用するならば、方言の分布から歴史を求めると考えられた(柴田 1969)。このようなことを扱う研究分野は「言語地理学」という名前と呼ばれ、言語地理学の目的は、方言圏論のような考え方をもとに方言の分布から歴史を求めることにあるとして、方言学の中でおおいに研究され、各地域できわめてたくさんの分布図が描かれた時期があった。

さらにこの考え方を押し進めて、新しい語形、つまり、言語変化が周辺部に向かって拡大する場合、どの程度の速度で広がるのかを歴史的な文献と照合する形で求める研究もなされた(徳川 1993, 徳川 1996, 井上 2003)。

3. 変化をとらえてみたい

日本で多くの方言地図が作成されたのは、1970～1980年代である。国立国語研究所も1970年代に『日本言語地図』という全国地図集(調査は1960年代)を出版し、さらに1980年代に調査した結果は『方言文法全国地図』として公表している。これらから30～50年くらいの歳月が過ぎたわけである。おおむね世代にして1～2世代の交替が見込まれる。親と子、祖父母と孫と考えれば、十分に言語変化の発生が見込まれる時間経過である。

また、分布変化は平均値ながら年速約 0.6~1 キロメートルと推定された。中間をとって、年速 0.8 キロメートルと考えよう。30 年の間隔を経て調査するなら 24 キロメートルの分布拡大がとらえられる可能性があることになる。50 年なら 40 キロメートルだ。後者は東京駅からでいえば、西は八王子の西端、北は鴻巣あたりに該当する。大阪駅からだと京都・奈良・明石といった市が含まれる範囲である。5 キロメートル以下程度の変化だと難しいかもしれないが、10~20 キロメートルを越える変化であれば、全国的な小縮尺の地図でもとらえることが可能だと考えられる。40 キロメートルになれば、十分明瞭に確認できるはずだ。

これまでの研究は、すでにとらえられた分布をもとにそこに反映されている歴史を読み取ることが中心であった。そのような歴史を反映しているはずの分布が、地を這うように同心円状に拡大している様子として、動的にとらえられるなら、これは世界でもはじめてのことになる。そう考えればわくわくするではないか。しかし、それだけではない。分布変化の動きをとらえることで、これまで研究がのっとってきた方言圏論や言語地理学のおおもとになる言語変化が示す地理的な変化—これは伝播とも呼ばれる—に証左を与え、この分野の研究成果を確固たるものにすることができるのである。

4. これまでにとらえられてきた変化

それでは、これまで分布の変化がとらえられることがなかったかという、実はそうではない。分布変化をとらえる努力はされてきたし、それをとらえた研究成果もあがっている。

一般にことばの変化をとらえるには、二通りのアプローチがあることが知られている。ひとつは、世代差をもって時間差と想定する方法である。例えば、同時期に親と子の両方を調べてその違いの中に 20~30 年の時間差が反映していると考えられるわけである。この方法では、上の年代が世代差に該当する時間の中で変化を起こしていないことが前提となる。親の世代が子供だった時代のことばと今の子供のことばを比べることで時間の中での変化がとらえられるからだ。上の世代が大人になる過程の中で獲得したことばと下の世代を同時代で比較しても、時間の中での変化をとらえたことにはならない。実は、これらの識別は難しい。

もうひとつのアプローチは、実際に時間間隔をおいて調査し、データを比較する方法である。これは確実に時間の中での変化がとらえられる。しかし、よほど気が長い人にしか向かない。研究成果をあげるのに 20 年かかりましたというのは、昔ならくじけずよくがんばったということでおおいにほめられたのだが、昨今は寛容ではなくなったのか、短期で成果があがらないとあれやこれや責められるという、まあ何とも世知辛い雰囲気の中で研究を進めなければならないようになってきた。

さて、これまでとらえられてきた分布変化も多くは世代間比較に基づくものである。例えば、図 4 は「おんぶする」という語について埼玉県東部でとらえられた分布変化である（亀田 2010）。右の中年層の地図を見ると左の高年層の地図には少ないかほとんど見られないオブル・オンブルが全域に広がっていることがわかる。

一方、実時間の中で変化がとらえられた例はきわめて少ない。そもそも実時間の中で比較した研究がほとんどないわけだから、変化がとらえられることも少ないのだろう。その中で

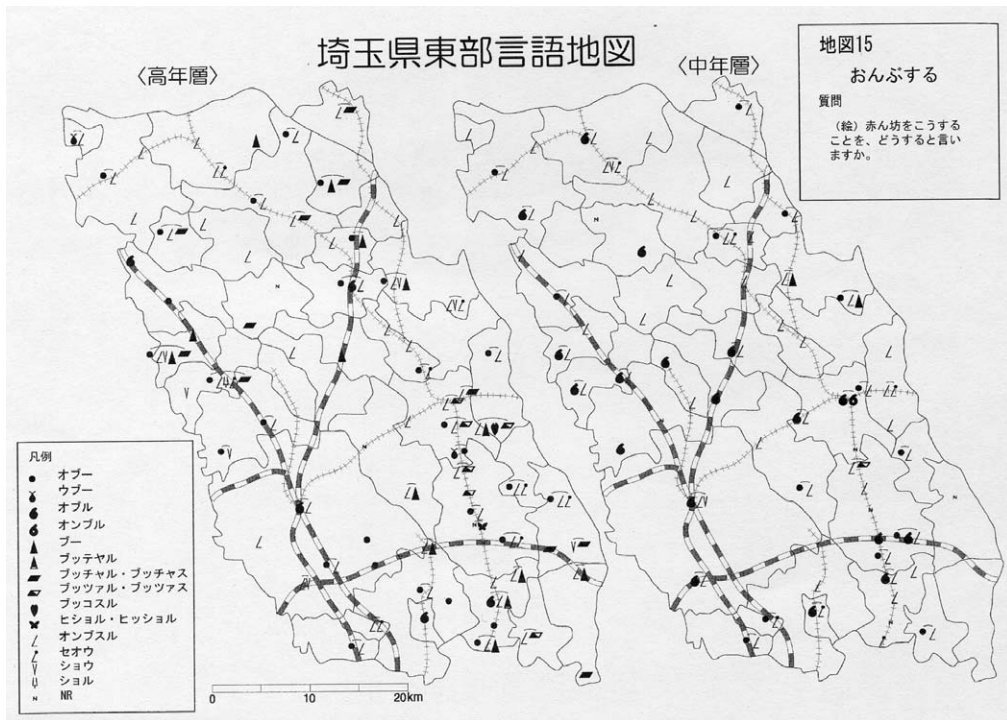


図4 埼玉県東部における「おんぶする」(亀田 2010)

注目したいのは、図5に挙げた富山県東部にあたる下新川郡でとらえられた「ピーマン」を表す語の変化である(永瀬 1977)。上下の地図は約5年の間隔で調査されたもので、上が古く、下が新しい。

地図の中程にあたる黒部川と小川の間挟まれた地域が入善町であるが、入善町を見ると、5年前の調査ではコショーが多く見られるのに対し、5年後の調査ではコショーがナンバンに置き換わっている。これは何を意味するかというと、入善町では「ピーマン」を表す語形がコショーからナンバンに変化したということにほかならない。つまり実時間の中で言語変化とそれともなう分布変化がとらえられているのである。

実を言うと、この地図が扱われている論文は共通語と方言の関係に重きを置いて書かれたものである。それゆえ、方言の中で発生した変化に関してあまり突っ込んだ言及がない。しかし、筆者の見る限り、実時間の中で分布変化をとらえた草分け的研究と思われる。

とりわけ注目したいのは次の2点である。ひとつは、わずか5年での変化がとらえられているという点である。言語の変化はきわめて短い時間で進行することを示している。第2点は分布の変化のしかたである。従来の考え方に従うなら中心部から徐々に広がると考えられる。入善町に広がるならこの町の中心地がある黒部川と小川の間あたりに新しい形(ナンバン)がまとまりそうなものだが、どうもそのようには見えない。ただし、広域としてとらえたこの地域全体では、入善町は周辺部にあたる(入善町の周囲が先進的)とされているこ

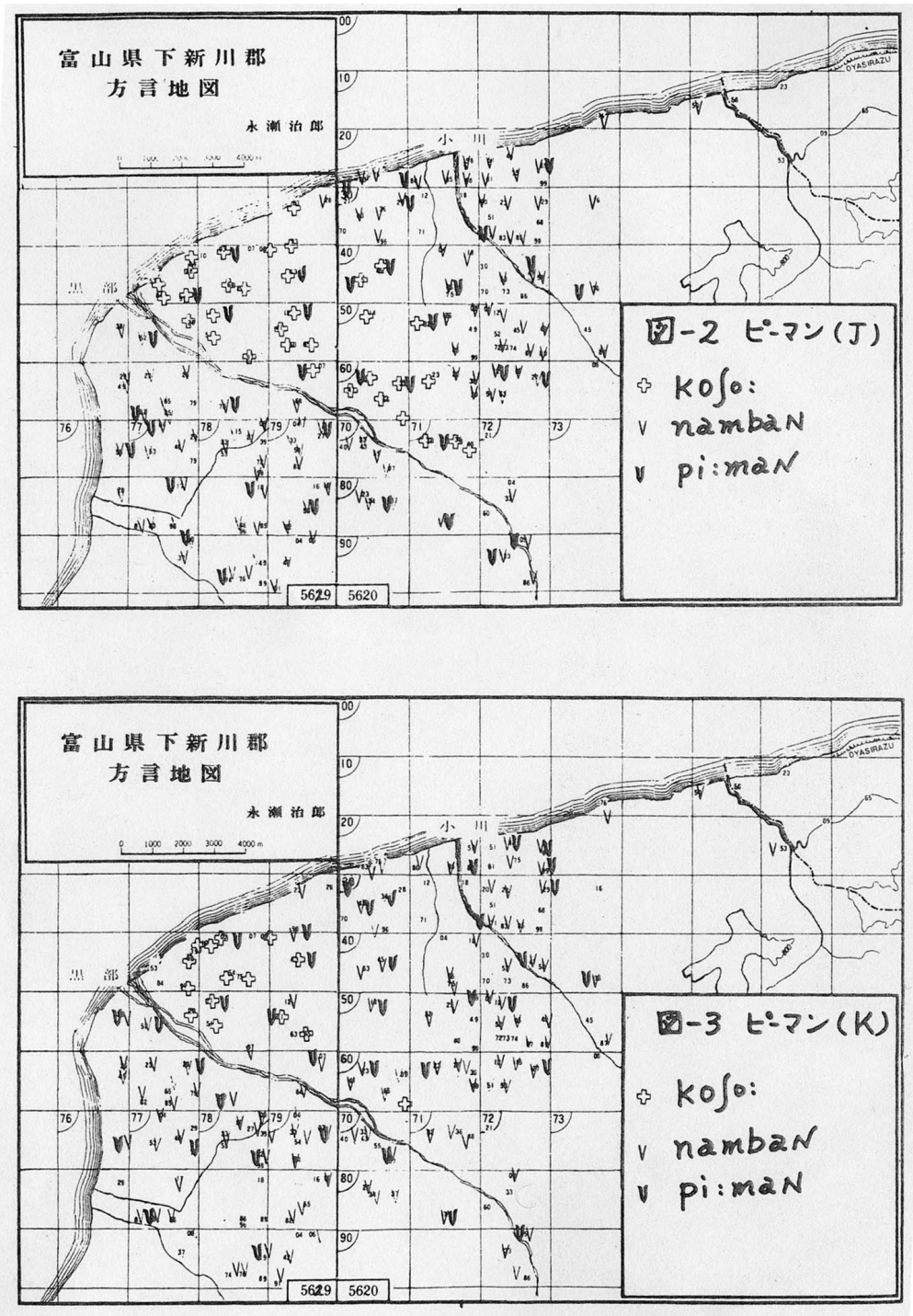


図5 富山県下新川郡における「ピーマン」(永瀬 1977)

とを考慮する必要がある。そうだとすると、入善町でも沿岸部ほど、古い語形のコシヨーが取り残されそうなものであるが、そのような事実も観察されない。実際の広がり方は、町全体を一気にカバーするような様子を見せている。

ところで、下新川郡の「ピーマン」は、うまい具合に変化がとらえられたわけであるが、これはおそらく、計画的にとらえられたものではなく、偶然だったのだろうと思われる。それでは、とらえられる蓋然性をできる限り上げる工夫はないものだろうか。

下新川郡の「ピーマン」の場合、ピーマンという近代初期に輸入された野菜に対する名称であるが、この地域では「唐辛子」の名称との関係で緊張関係が続いていたものと考えられる。実は、入善町では「ピーマン」の変化（コシヨー→ナンバン）により「ピーマン」と「唐辛子」（コシヨー）が区別できるようになったのであった。「ピーマン」と「唐辛子」をことばの上で区別するという必然性がそこにはあった。このような変化の必然性を抱えた項目や変化の途上にあることが明らかな項目であれば、分布変化がとらえられる可能性が高くなるだろう。特に文法分野では、変化のメカニズムが明らかな項目やまさにそのメカニズムのために変化過程上にあることが知られているような項目がある。理論と現実の関係をうまく組み合わせることで、「下手な鉄砲」状態からの脱却は可能なはずだ。

5. 変化がないのは良い便り？

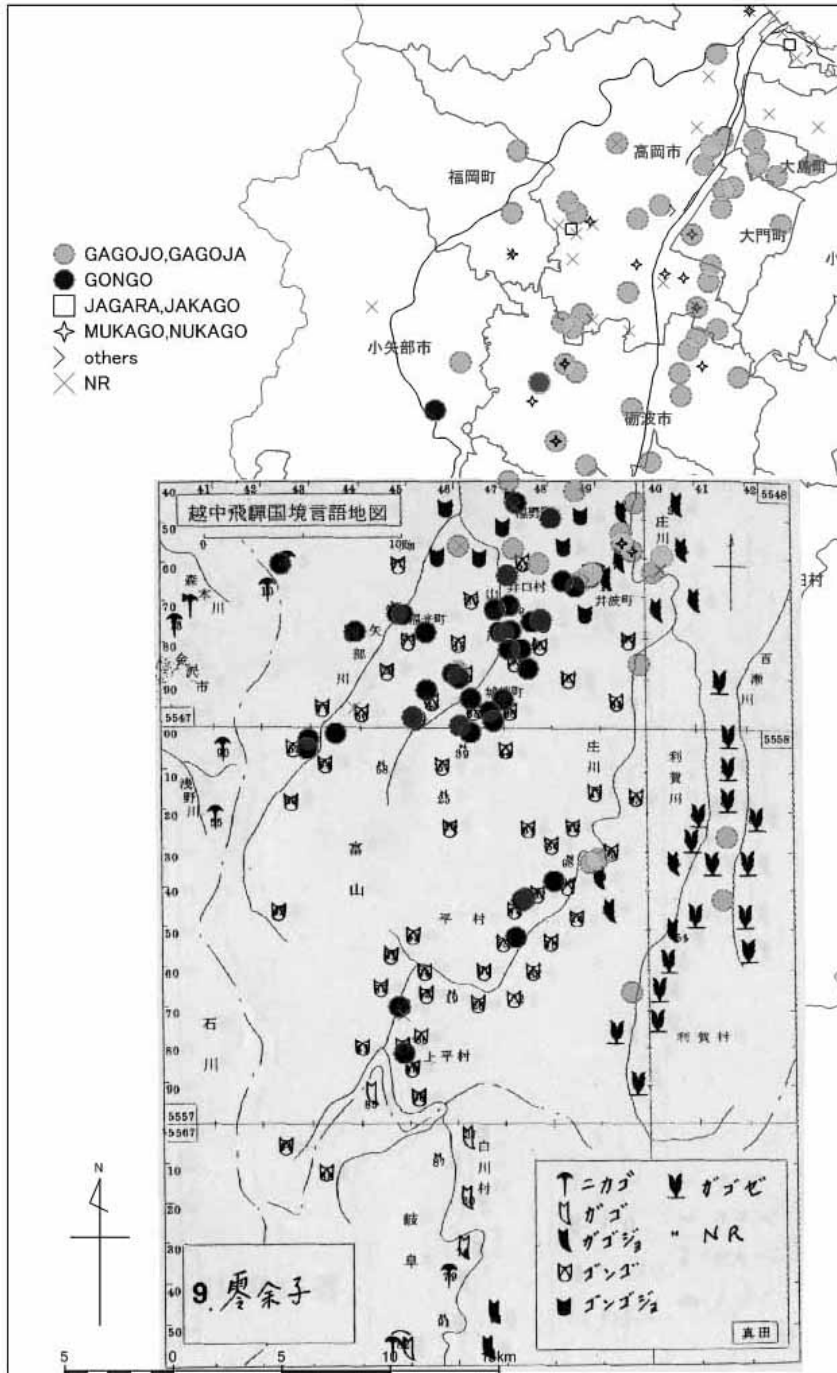
うまく工夫して項目を選定したとしても、分布変化が見られる項目は、思いのほか少ないかもしれない。それは、ことばが変化するのは確かだが、思ったほどは変化しないのかもしれないという予想に基づくものである。その根拠は、ことばの持つ機能にある。ことばは伝達の道具である。伝達の道具がそうコロコロ変わってはいけないのである。コロコロ変わられたのでは、道具として使い物にならない。

図6は富山県の西部を流れる庄川流域の「むかご」の方言分布の40年（実時間）を重ねたものである（40年前のデータは真田 1976）¹。この地域では、平野部つまり北部が文化の中心地と考えられ、従来その考え方に沿って分布の解釈が行われてきた。それに従えば、南部の山間地に分布するゴングは、40年もたてば北のガゴジョ・ガゴジャ（これらをまとめて以下では、ガゴジョ類と呼ぶ）に浸食されてしまっているだろうと予想していた。ところが実際にはゴングはかなり根強く南部にまとまったままで、40年前とほぼ同様の分布を見せている。特に注目されるのは庄川の上流域である。40年前にゴングとガゴジョ類が入り組んでいたところがあったが、その入り組み方は40年たっても変化していない²。

思うに、ことばという伝達の道具を変更することはかなりのエネルギーを要することなのだろう。それゆえにそう簡単には変わらないし、変えられない。しかし、変わるなら一気に変わってくれないと、伝達道具として使えなくなってしまう。ゆえに庄川流域の「むかご」のように変わらないときはいっこうに変わらないし、下新川郡の「ピーマン」のように変化

¹ 筆者と富山大学人文学部中井精一研究室などが共同で2008年から調査を開始し、現在も調査は継続中である。

² このことを明確にするためには、現在まだ調査が手薄な山間部の五箇山地方の実態を把握する必要があるが、2012年度にはこの地域を調査する計画である。



Dialectal distributions of 'mukago' between 1968 and 2008.

図6 富山県庄川流域における「むかご」の40年

するときは非常に早いスピードで変化するのだろう。

6. 方言の形成—方言学の究極の目標—

実時間での分布比較は、多くのことを語ってくれる。これを積み重ねるなら、方言学の究極の目標というべき方言形成論、すなわちそもそも方言というものがどのようにしてできたのかという問題にアプローチできるはずだ。現在、全国規模での方言分布調査を研究プロジェクトとして展開しているが、これはこの大問題への大きな手がかりを得るための第一歩にほかならないのである。

●参考文献●

- 井上史雄(2003)『日本語は年速一キロで動く』講談社現代新書 1672, 東京:講談社。
 亀田裕見(2010)「埼玉県東部地方の方言分布と世代差 (1) —語彙の分布—」『文学部紀要(文教大学文学部)』23(2): 1-59。
 永瀬治郎(1977)「下新川の2つの分布図」『国語学研究』17: 左 1-11。
 真田信治(1976)『越中飛騨国境言語地図』(真田ふみ著『越中五箇山方言語彙5』付録) 富山:私家版。
 柴田武(1969)『言語地理学の方法』東京:筑摩書房。
 徳川宗賢(1993)『方言地理学の展開』東京:ひつじ書房。
 徳川宗賢(1996)「語の地理的伝播速度」言語学林 1995-1996 編集委員会(編)『言語学林 1995-1996』893-909, 東京:三省堂。
 柳田国男(1930)『蝸牛考』東京:刀江書院。

《要旨》方言の分布は時間の流れの中で変わるものなのだろうか。方言が言語である以上、方言も変化する。そのような言語変化が発生すれば、分布もそれに応じて変化する。その変化は徐々に中央から周辺部に拡大するものと考えられてきた。ところが、実際にとらえられている分布変化は、急速で一気に拡大するものである。その一方で時間を経てもなかなか変化が起らないこともある。これらは伝達の道具としての言語の性質ゆえのことと考えられる。このように分布変化を追うことで方言の形成という方言学の究極の目標に迫る。

Abstract: Do dialectal distributions change over time? Dialects change, since they are languages. When a language change occurs in a dialect, it inevitably results in a change in dialectal distribution. It is thought that language changes diffuse gradually from the center to the periphery, but in fact, changes happen quickly and spread suddenly. On the other hand, language often does not change so easily. This is because of the nature of language as a tool for communication. We approach the study of how dialects form, which is the ultimate goal of dialectology, by analyzing changes in dialect distributions.

大西 拓一郎 (おおにし・たくいちろう)

国立国語研究所時空間変異研究系教授。文学修士。東北大学助手、国立国語研究所室長・主任研究官を経て、2009年10月より現職。

主な著書・論文：『現代方言の世界』（朝倉書店、2008）、Mapping the Japanese languages. (*Language and space: An international handbook of linguistic variation: Language mapping*, Mouton de Gruyter, 2010)、「言語地理学的研究目標は何？」（『語言教学と研究』151, 2011）。

社会活動：日本方言研究会世話人。

基幹型共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」
プロジェクトリーダー 大西拓一郎（国立国語研究所 時空間変異研究系 教授）

プロジェクトの概要

日本語の方言分布がどのようにしてできたのかを明らかにすることを目的に、全国の方言研究者が共同でデータを収集・共有しながら進める研究である。日本の方言学においては、言語の地域差を詳細に調査し地図に描く言語地理学的手法に基づく研究を50年以上前から本格的に開始した。国立国語研究所が『日本言語地図』『方言文法全国地図』という全国地図を刊行する一方、大学の研究室を中心に地域を対象とした詳細な地図が数多く作成されてきた。そこで把握される方言の分布を説明する基本原理は、中心から分布が広がると考える「方言圏論」である。問題はその原理の検証が十分に行われてこなかった点にある。幸いにして日本には長期にわたる方言分布研究の蓄積があり、現在の分布を明らかにすることで時間を隔てた分布の変化が解明できると考えられる。具体データをもとに方言とその分布の変化の解明に挑戦する、世界にも例のないダイナミックな研究を目指す。